

## 本文組見本

第1巻「論語」より

### 論語

### 五一

31 子曰、學而不思則罔。思而不學則殆。

子曰く、學びて思はざれば則ち罔し。思ひて學ばざれば則ち殆し。

**通釈** 孔子言う、博く学ぶだけで、自分の心で思いめぐらしてよく考え、よくその理をもとめてみないと、学んだことがばんやりしていて、その道理をつかむことはできない。之に反して、自分の乏しい知識で思いめぐらすだけで、博く他人の言や古人の教えを学ぶことをしないと、考え方方が狭く、一方に偏って、危険この上もないものだ。

**語釈** ○学 他にならない学ぶこと。読書。○思 思索研究すること。○罔 へらいこと。惘と同じで、理にくらく明らかになれないこと。はつきりとその道理がつかない。○殆 危と同じ。あぶないこと。主観的な思索だけに頼って、客観的な博い裏づけがないと、見解が固陋になつて危険であるの意。この「殆」には諸説があつて、何晏は「疲れる義」として精神疲殆といい、陸徳明はまさに「怠」に作るべしといい、劉宝楠は殆は「疑」と訓じて、「学んで思はざれば、則ち事として徴験なく、疑つて定むる能はず」(正義)と解した。しかし論語の「多くを見て殆きを闕く」<sup>(34)</sup>の「殆」と同義に解釈するのがよいようだ。

**余説** 本章は読書と思索の伴わねばならない学問論を説いたもので、学者にとっては極めて大切な名言である。論語は「学」の一字に始まって、全篇孔子の好学をうかがうに足る言葉に充ちている。特に衛靈公篇の「子曰く、吾は嘗て終日食はず、終夜寝(レ)ねず、以て思ふ。益なし。学ぶに如(レ)かざるなり」<sup>(43)</sup>や、陽貨篇の大言六蔽<sup>(44)</sup>の章は、学の功用を高唱して憚らないものであるが、孔子はその学に加えて沈潜思索して自己のものを産み出すことの大切さを忘れていない。私の学生時代には左翼と右翼の思想対立が激しくて、左の者は乱説し、右の者は狭く考えこんで、共に一方に偏するきらいがあった。東京帝大が、法学部の入学試験にこの論語の一章を出して評論させたことがあった。博学と思索の両立を教えた老婆心からの出題だと学生へ論じたことを思い出す。中庸に博学・審問・慎思・明辨・篤行(第二十章)を説き、宋の程子はこの五者の中で一を欠くも学に非ずと言ったのは、共に孔子の本旨述べたものであろう。

32 子曰、攻乎異端、斯害也已。

子曰く、異端を攻むるは、斯れ害あるのみ。

**通釈** 孔子言う、学問の第一の目的は、立派な人間になることだから、本筋を離れた学説を学ぶことは、益が無いだけでなく、むしろ弊害があるばかりだ。

**語釈** ○攻 治と同じ。○異端 聖人たるの道と端緒を異にした学説。息軒は異端とは雜書を謂う(集説)と注した。朱注には、楊朱・墨翟

の言や、仏教の学を異端としてきびしく排斥しているが、勿論、孔子の当時はまだ楊墨の学は無く、仏教は伝来していない。孔子の本筋とした学は、人格完成の学であり、実践の教えである。人たるの道が孔子にとっては一貫の道で、他の雜説・知識の学も多端であろうが、悉く異端といえるであろう。○斯害也已 これはすなわち害になるばかりだと強い意味。阮元は、高麗本には「已」の下に「矣」の字があるという。正平本にもあるが、ある方がよい。「也已」は意味を強める終詞。「ノミ」とよむ。「也已矣」とすれば、更に強い。

余説 異端を治めると弊害があるだけだという孔子の言は、決して自分の学問以外のすべてを排撃した固陋の言ではない。孔子は七十歳で心の欲するところに従つて矩矯を躊躇<sup>ちゆうしょ</sup>えない境地に達した。しかし本章は、初学者が人間として完成もしないのに、右顧左眄<sup>ごくみがん</sup>して雜學をついていては、何時になつても人としての成長がないことを戒めたものだろう。孔子が怪力亂神を語らなかつた<sup>(68)</sup>ことも同じことであるし、孟子が「楊子は我が為にするを取る。墨子は兼愛す。子莫<sup>(69)</sup>は中を執る。中を執るは之(道)に近しとなす。中を執つて權<sup>(70)</sup>する無きときは、猶、一を執るがごとし」(尽心上)といつたのも、中庸を以て人たるの道とする儒家の説として符節の合つたものだろう。

33 子曰、由、誨<sup>レル</sup>女知<sup>ル</sup>之乎。知<sup>ル</sup>之爲<sup>レル</sup>知<sup>ル</sup>之。  
不知爲<sup>レル</sup>不知。是知<sup>ル</sup>也。

子曰く、由、女に之を知るを誨へんか。之を知るを之を知ると爲し、知らざるを知らずと爲す。是れ知るなり。

通釈 孔子が子路に向かつて言った、由よ、お前に物事を知ることを教えようか。自分の知っていることは知つていいとし、知らないことは、まだ知らないと、心にはつきりさせる。これが本当に知るということだ。

語釈 ○由 姓は仲、名は由。字を子路又は季路といった。魯の人で、孔子より九歳の年少であった。孔門第一の武勇の士で、孔子はその人となりを愛した。正直者であり、勇を好み、熱情的の人であったが、ものを速断する欠点があった。○誨 教とほぼ同じであるが、曉<sup>あさ</sup>かにおしえること。○女 汝と同じ。○知<sup>ル</sup> 「之」は動詞の下につける語助の字で、うけるものがない。「之」は読まなくてもよい。以下の二つの「之」は皆同じである。一説に「之」は道を指すと。

余説 孔子は子路を四科十哲<sup>(256)</sup>の一人と認めて政治の働きがあることを許した。子路は季氏に仕え、蒲の奉行となつて、その施政は孔子から称讃されたこともあった。しかし、子路の率直と武勇は、ややもすると思慮の足りないことがあって、しばしば孔子から注意されている。暴虎馴河<sup>(257)</sup>の勇<sup>(158)</sup>と評され、「野なるかな由や、君子は其の知らざる所に於て、蓋し闕如<sup>(259)</sup>す」<sup>(306)</sup>と戒められたこともある。深謀遠慮で苦勞人であった孔子から見たら、率直な子路には稚戯に類する行動が多かつたことだろう。しかし、孔子に向かつて「けずけと意見を放つたのも子路であるし、人一倍孔子の身の上を心配して、親獅子が子獅子をかばうように孔子を護つたのも子路であった。衛の乱に奮戦して負

索引組見本

第1巻『論語』より